第二十六条　三字さがり・三字あがり

底本：高知本　対校本：鴻山本

【翻刻】

第二十六　三字さかり　三字あかり

三字さかり三字あかり同しく三つ引と申も、皆ならふ節をきらふての事也。三字あかりと申ハ、三つつゝいて①くる（ママ・り）　あくるをいふ也。三つなから同しやうにくりあけてハ、声もいり、うたひやすからす。本よりもきゝにくきもの也。三字さかりと申ハ、さくるふしの三つならへてさかりたるを大きにきらふ也。三つ引と申ハ、ひくふしを三つならひたるをいふ事也。うたひのしたるくなるへきもとひなるによつて、これを音曲のやまひと云り。かやうの所に気を御付被成候へハ、うたひしたるくならす、文字のなまりもをのつからなくなり、よろつのさハりうしなふ物にて御さ候

【校異】

① くるあくる－くりあぐる（鴻）

【現代語訳】

第二十六　三字下がりと三字上がり

三字下り・三字上がりは、三つ引きと同じ類と言われているが、それら皆すべてが連なった節を嫌うということに由来して生まれたものである。

三字上がりというのは、三つ連続して音を高く張り上げる事を言うのである。三つ全て同じような高さに張り上げると、声も内に入ってしまい、謡うことが容易ではない。言うまでもなく聞きにくいものである。

三字下がりというのは、下げる節を三つ連続して下がる音をひどく嫌うことである。

三つ引きというのは、引く節を三つ続けて同じ高さに並べて引いて謡うことを言うのである。謡が重くれる原因となるため、これを音曲の病と言う。このような箇所に注意すれば、謡が重くれることなく、文字の声（声調）のおかしさもなくなり、あらゆる謡曲歌唱の障りも解消できるのである。

【解説】

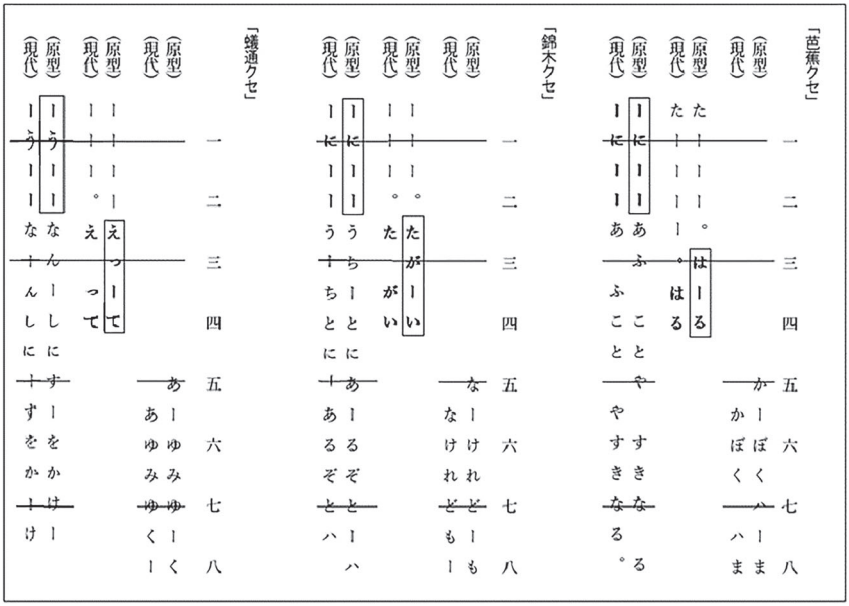
三字下がり・三字上がりは、詞章三文字の母音の引き方の悪例を示す用語であり、三つ引きと同じ種類のものとされる。この三つ引きとは、一字の母音を三字分引き伸ばして謡う、現代の三つ引きの用法とは異なり、三字の母

音を並べて引くことが良くないという意味を指す。これらの用語は、『八帖本花伝書』にも類似した説明が見出され、三つ同じように連続して引くことで、変化のない聞き苦しい謡い方になるという注意が述べられている。

三字下がり・三字上がり・三つ引きの具体例については、『うたひ鏡』より後に成立した『音曲玉淵集』に詳しく挙げられている。三字下がりは、基本の音が三つ連続して下音に並ぶもの、三字上がりは、三つ連続して上音となる箇所の例を示し、直しレベルの実践上の謡の技法であることがうかがえる。この謡い方は、ゴマ点の方向が三つ連続する箇所であっても、ゴマ点の方向が同じようなニュアンスにならないような謡い方の工夫が必要だと説明する。

また、三つ引きの例として、［譜例1］の四角に囲んだ箇所が示すように、現代では、三つ並べて引かずに一つ寄せて謡うことが多いが、当時は寄せずに三つともに並べて引いて謡われていたことがわかる。

参考に掲げた複数の謡伝書に散見するように、当時の実践上の謡い方において、三つ連続して上音が並



［譜例 1］　※（現代）の詞章配分は、観世流の一例

ぶ、下音が並ぶ、同じ長さで引くことを避けるという共通の認識があったと推測される。

【参考】

三字上がり・三字下がり

①『八帖本花伝書』三巻

一　三字下り・三字上り・三つ引きと申も、皆、並ぶ節の事にて候。三字上りと申は、三つ続引てくり上ぐるを申なり。声入候て、謡ひ悪う候てより、第一聞悪き物也。是、大きに嫌ふことなり。三字下りと申は、下ぐる節の、三並べて下げたるを、三字下ぐると申也。是、大きに嫌ふ節なり。三引と申は、引く節を三つ並びたるを、三つ引きと申候。謡のねばくしだるき瑞相なり。殊更、嫌ふ節なり。何も、似る事の並ぶは、聞き候ても、同名にて聞悪し。其上、謡しだるく候て、囃子の重荷と成候。よく心掛けべし。

（林屋校註『古代中世芸術論』1973：555）

②『音曲玉淵集』五巻

一　三字あがり　　是は嫌ふふし也

三　△うきねそかはる此うみは　　井△互いによみしゆえなれや

下　、一、吉

一　三字さがり　　右同

小△花見車くるゝより　　山△人を助くるわさをのみ

一一吉　　一、一吉

井△是は此あたりに住むものなり。此等の本願在原のなりひらは世に名をとめし人なり

詞もかやふの所下にて三字さかるは聞きにくし

一　三つ引　　是もきらうふし也

（引きの箇所のみ※で表示）

は△はるにあふ事　はるとよせるニハ非スはヲもたずるノ字ヲ持てにノ字ヲ引吉

錦△たかひに内外にい　是も右同心のひトよせるニ非ス

新△われこそ梅の　是も三つ引ノ類ニ成れノ字ヲ不持

アリ△ゑつてう（持引）南枝に　ゑエと延る故三つ引に聞ゆ　ゑツと少和につむへし

（臨川復刻本 1975：347～348）

③『節章句秘伝之抄』

一、三字あがりと云事、〈三井寺〉「うきねぞかわるこの海は、浪風も静にて」。

一、三ツ字さがりと云事、〈小塩〉「花見車くるゝより」。

（法政大学能楽研究所編『幸正能口伝書』1984：95）

④『塵芥抄』九　上一

一　三ひきと云事　松の光もあまみてる　次第に跡の字をなかく引へし　同程に引事悪し

一　三つ字あかりと云事　浮ねそ替此海ハ浪風もしつかにて

一　三つ字さかりと云事　花見車暮るより

（早稲田大学演劇博物館編『能・狂言文献資料集成マイクロフィルム版』翻刻データ※参照）

⑤『集花書』

一　三ひきといふ事　松の光りもあまミてる　次第ニ跡の字をなかく引へし　同程に引事悪

一　三字あかりといふ事　うきねそかはる此うミハ波かせもしつかにて

一　三字さかりと云事　はなみ車くるゝより

（『能・狂言文献資料集成マイクロフィルム版』翻刻データ※参照）

⑥『謡花伝書』

一　三字（ジ）あかり　うきねそかはる此うミは

一　三字さかり　はなみくるまくるゝより

一　三ひき　はるに（悪吉）あふ事

（『能・狂言文献資料集成マイクロフィルム版』翻刻データ※参照）

⑦『謡の秘書』

一　三字あかり　うきねそかハる此うみハ

一　三字さかり　はなみ車くるゝより

一　三ひき　はるにあふこと

（『能・狂言文献資料集成マイクロフィルム版』翻刻データ※参照）

⑧『諷極秘伝書』

一　三字あかり　うきねそかハる此うミハ

一　三字さかり　はな見車くるゝより

一　三ひき　はるにあふこと

（『能・狂言文献資料集成マイクロフィルム版』翻刻データ※参照）

（④～⑧※翻刻データ：「謡伝書の具体的理解と体系的把握へ向けた基礎作業－演劇博物館所蔵謡伝書の翻刻と謡本の節付け研究」研究代表藤田隆則 https://rijtm.kcua.ac.jp/pub/2017web/archives/resarc/utai/index.html）

（坂東　愛子）